



山あいの自然体験キャンプが 「子どもたち」と「地域」にもたらすもの

OKB総研 委嘱コンサルタント

河合 達郎 氏（一般社団法人 ^{やまなび}山学 代表理事）

薪割り体験や夜のクワガタ採集、そして川の流れを生かした天然のウォータースライダー……。この夏、私たち山学は本巣市北部の山あいで子どもたち向け自然体験「ヤマナビキャンプ」を開いた。これらはいずれも、参加した子どもたちが熱中したコンテンツだ。

普段の暮らしの中ではどうしてもさみしさや不便さが目立つ中山間地だが、キャンプ中には子どもたちのにぎやかな笑い声が響き、地域の魅力が際立つ瞬間があった。山あいにおけ

る自然体験は子どもたちに、そして地域にどんな効果をもたらすのか。ヤマナビキャンプで見られた光景から考察してみたい。

本巣市の山あいで 1泊2日の自然体験

ヤマナビキャンプは夏休み期間中の7月26・27日、本巣市北部に位置する根尾地域にある「BMXパーク」を舞台に1泊2日の日程で開いた。開催は昨夏に続いて2回目。去年は子どもたちだけでのキャンプイベントにした

が、今年は親子参加の形とし、親子に関心が高そうな「防災」と「生物調査」をテーマにした。本巣市内の小学校へのチラシ配布を中心に案内し、いずれも市内の親子4組8人が参加した。

1泊2日の日程は一級河川・根尾川の生物調査からスタート。長年、地域の水生生物の調査をしている先生に案内してもらい、捕獲用の網をもって川に入った。その後、薪割りや火起こし体験、竹炭づくり、川での自由遊び、スイカ割りといったメニューを楽しんだ。



ヤマナビキャンプに参加した親子のみなさん



天然のウォータースライダーに身を任せて

夕方から夜にかけては、最寄りの温泉施設での入浴、BBQの後、ライトトラップを使った昆虫採集にも挑戦した。

2日目は、キャンプ拠点の目の前にある根尾谷地震断層観察館を訪れ、130年以上前に発生した巨大地震によって生じた地層のずれを見学。その後、地元のタクシー事業者さんの案内で、知る人ぞ知る砂防ダムの滝スポットで水遊びを楽しみ、2日間の日程を締めくくった。

私たちがヤマナビキャンプを開く狙いは大きく二つある。地域の自然を生かした学びの機会の提供という「子どもたち」に向けられたものと、子どもたちが訪れることによりこの地のにぎわいにつながればという「地域」に向けられたものの二つだ。

そんな二つの観点から、キャンプでのエピソードを振り返ってみる。

非日常体験に夢中になれる

子どもたちの姿で何よりも印象的だったのは、心から楽しみ、夢中になる姿だ。子ども向けキャンプと結びつくキーワードの一つに「非日常体験」という言葉がある。まさに日常生活の中ではなかなか味わえない体験を大いに楽しむ様子があった。

参加した4組の親子はお互いに初対面だった。初日の集合後、自己紹介をした時には緊張から名前を言えない子もいたが、川遊びを始めると一気に笑顔になった。ある子が、浅瀬でライフジャケットを着て流れに身を任せるとウォータースライダーのように遊べることを発見すると、それを見てみんなも続き、何度も大きな歓声を上げながら楽しんでいた。上流に行っては



夜の昆虫採集でクワガタをゲット



ちょっとした岩場から飛び込みに挑戦

下流へと流され、またそれを繰り返し、大きな岩におしりをぶつけて「いてーっ!」と叫んで笑い転げる様子があった。

また、ある子は、薪割りに熱中した。安全な薪割り方法を教わりながら、最初はおそろおそろ斧を振り下ろしていたが、スパンと割れてはじけ飛ぶ感触

が手に染みついたのか、食事の時間になっても無心になって薪を割り続けていた。

虫好きの子は、ライトトラップでの昆虫採集に目を輝かせていた。本格的なライトトラップには真っ先に大小の蛾が大量に集まってくる。なかなか近寄れない子もいる中で、この昆虫採

集を目当てにキャンプに参加した子はお構いなしに飛び込んでいった。ノコギリクワガタやコクワガタなど、虫かごいっぱいになるまでゲットして大興奮の様子で、就寝時間になってもなかなか寝付けないでいた。

こうして振り返ってみると、1泊2日のキャンプ中に子どもたちがスマホを触る様子を一度も見なかったことに気が付いた。今回参加した子たちが日常のどの程度スマホを触っているのかはわからないが、SNS上では、子どもの自然体験の目的に「デジタルデトックス」を上げる声もある。YouTubeやオンラインゲームがなくても、熱中して止まらなくなるほど楽しめるもの、そんなアクティビティーが自然の中にあるということに気づいてくれたのではないだろうか。

苦手な虫、川への飛び込み… 挑戦と自信に

ちょっとドキドキすること、あるいはこれまで苦手だったことに挑戦しようとする姿もあった。

虫好きには最高だったライトトラップだが、反対に虫が苦手な子もいた。最初は、蛾が飛び交い、カナブンが突撃してくる光の中に飛び込むのをためらい、遠巻きに見守っていた。それでも、周囲の子たちの楽しそうな声に導かれるようにして少しずつ近づいていくと、最後は友だちにも協力してもらいながらクワガタを捕まえていた。

キャンプ後のアンケートでは、保護者の方から「両親ともに虫が苦手だったので、(子どもも)虫と触れ合うことがほとんどありませんでした。周りの仲間に刺激を受けながら、虫に興味を

持って捕まえることに夢中になる子どもその姿を間近で見られたことがうれしかったです」との声が寄せられた。

川遊びの中では、ちょっとした飛び込みができる川岸の岩を見つけたお母さんの一人がお手本を見せて、子どもたちも挑戦した。ある子は、自分で自分を鼓舞するように何度も「いくよ!」と叫び、勇気を振り絞った末に岩から川へと飛び込んだ。水面に顔を上げた時のその表情は何とも誇らしげで、見守っていた保護者やスタッフたちからも拍手がわいた。

災害時に便利なファイヤースターター(こすり合わせて火花を散らせる金属の棒状の道具)と周囲に落ちていたスギの葉を使っの火起こしにも挑戦した。まずはベテランキャンパーがお手本を見せてくれたが、自分の手で火花を起こし、着火させるの



スタッフを背後から水鉄砲で狙い撃ち

はちょっと怖い。みんな最初はおそろおそろ扱っていたファイヤースターターだが、順番にチャレンジするうちにうまく火を付けられるようになっていった。

「初めてのことで興味を持って取り組み、我が子が少しくましくなったような気がします」。事後アンケートでは、保護者の方からこんな声もいただいた。家庭や学校といった日常生活の中では抵抗感や怖さがあることでも、こうした自然の中ではチャレンジし、ちょっと自信を付けられる。そんな前向きな雰囲気が感じられた。

周囲の人たちと 自然に生まれる交流

もう一つ、子どもたちの姿から感じたよさがあった。周囲の人たちとの交流だ。

紹介したように、参加した親子はお互いにもともと面識がなかった。そんな最初の緊張感は川遊びを始めるとすぐに解けていったが、意外だったのは、子どもたちが自分以外の親やスタッフともあつという間に打ち解けあって遊ぶようになったことだった。

水を掛け合ったり、川に流されたり、スタッフの背中を水鉄砲でこっそり狙ったり。参加した保護者の方々のやさしさとフレンドリーさのおかげでもあったが、他のお母さんと楽しそうに川に歩いていく後ろ姿に「あれ、本当の親子だったかな?」と見間違ふようなこともあった。

子どもたちにとって、親や先生以外の大人と交流する機会は限定的だろう。日常生活の中でコミュニケーションをとろうと思えば緊張することもありそうだが、キャンプの中ではごく自然に

笑い合っていた。

もちろん、子ども同士や親子の間の交流もほほえましかった。捕まえたサワガニを友だちに手渡してあげる子。BBQの時、みんなで場所を譲り合うように並んでマシュマロを焼く姿。スイカにお母さんの似顔絵を描き、みんなで笑い合う場面もあった。他者との交流は、近年重要視される「非認知能力」の一つでもある。参加した子の一人は、事後アンケートで「いろんな人と仲良くなったからよかった」という感想を寄せてくれた。

地域のファンを増やす可能性

ここまで「子どもたち」の観点からエピソードを紹介してきたが、次に「地域」の観点からも振り返ってみたい。第一に、地域のファン、あるいは関係人口を増やすことにつながる可



似てる?スイカに描いたお母さんの似顔絵

能性だ。

最初のアクティビティーは根尾川の生物調査だった。長年、この地域で生物調査をしている先生が指南役に来てくれ、みんなで川底を網で探りながら歩いた。1時間足らずの間に、絶滅危惧に分類されるアカザやアジメドジョウといった水生生物を10種類も捕まえ、こうした生きものの種類から「水がとともきれいだ」との評価を教えてください。貴重な生きものが今もなお暮らす自然環境は、訪れた親子にとっても魅力的に映ったことだろう。

また、田舎ならではのおもてなしの心も感じてもらえたかもしれない。地元のタクシー事業者さんは、砂防ダムの隠れた滝スポットまでマイクロバスで案内をしてくれた。

ある農家さんは、心おきなくスイカ割りができるようにと、6玉もスイカを提

供してくれた。「BBQで焼くでしょうか」と、みたらし団子を50本提供してくれた方もいた。キャンプの拠点となった「BMXパーク」は地元林業会社の協力により、併設するカフェ施設まで含めて貸し切り利用をさせていただいた。

地方創生の文脈では、地域のファンを増やすカギの一つに、地元の「人」が挙げられることも多い。こうしたキャンプイベントは、地元の人たちとの直接・間接の交流が生まれる機会になる可能性も持っている。

地域の価値を再発見する

もう一つ、「地域」の観点から挙げておきたいのが、こうしたイベントが地域の内側の人たちが自分たちの地域の価値を再発見する機会にもなりうるということだ。

本巣市は2004年に4町村が合併して誕生した南北に大きな自治体で、今回のキャンプ地は北部の旧村地域にあたる。キャンプに参加したのは4組とも市内の親子だったが、みな北部からは距離のある地域に住む方々だった。こうして地域の「外部」からやってきて、この地の自然の中で楽しんで過ごす姿は、地域の人たちにとっての励みにもなることだろう。

現実には、この地では過疎化が進み、公共交通や医療など根源的なサービスの縮小も目立っている。そうした厳しい現状の中において、地域の魅力を活用する手段を探るヒントにもなりそうだ。

参加の「ハードル」という課題

「子どもたち」と「地域」にとっての効果と可能性を感じつつも、今後発



ダムの隠れた滝スポットで打たれて楽しむ

展をさせていくには課題も山積している。その大きな問題の一つが、参加のハードルだ。

序盤で紹介した通り、昨年のキャンプは子どもたちだけが参加する形式だったが、今年は親子参加型に切り替えた。その理由は、前年の経験から、慣れない環境で一晩を過ごす子どもたちに対しては、想定以上に個別の対応が必要だと実感したからだった。冷房のない就寝環境や夜の屋外トイレは、慣れない子どもたちにとっては苦しくて怖い。「それこそが自然体験キャンプだ」と言ってしまうほどだが、配慮の必要性は感じていた。

そこで、今年は親子参加型にしてみた。だがその結果、参加者が減ってしまった。親も参加することへの抵抗感や、仕事を休まなければならないなど物理的な難しさもあったと思われる。親子での参加となり、参加費も高く設定せざるを得ない。となると、やはり「子どもだけ」という形式の方が、ニーズが高かったのかもしれない。

また、アクセス面でのハードルも浮かんた。今回、キャンプ地までは自家用車でもローカル線でもアクセスできるよう集合時間を設定したが、参加者はいずれも自家用車でやってきた。宿泊を伴うキャンプで大きな荷物もあり、公共交通機関の利用よりも気軽な車を選ばれたのだろう。

岐阜県内で取り組まれている自然体験キャンプを見ると、岐阜、愛知、三重の各県主要駅までバスを出して送迎するプランを用意しているところもある。夏休みの自然体験キャンプは都市部の親子の中でも参加ニーズは

高いと思われるが、こうした親子の期待に添えていくには、アクセスのハードルをクリアするのが必須となりそうだ。

子どもの「成長」を期待するニーズ

また、私たちがキャンプで大事にしたいことの軸を磨いていく必要性も感じた。ある保護者の方からは、事後アンケートで「 TENT張りや片付けなど、本来は自分たちでやるべきところのほとんどをお任せする形になり申し訳なかったです。面倒くさい大変な作業を子どもたちに経験させてもいいと思いました」というご意見をいただいた。

夏休み、子どもを自然体験へと送り出す保護者の思いの中には、きっと子どもの「成長」への期待がある。快適な自宅のように整っていない自然環境の中で、自分でできることは自分でやるという姿勢を身につけてほしいというニーズは高いのではないだろうか。この点については、自然の中で子どもたちに学びの機会を提供したいという私たちの当初の狙いに立ち返り、ヤマナビキャンプとしてのスタンスを定めていく必要を感じた。

人口減・少子化という現実問題を抱え、日常生活を送っていると、あれもない、これもない、と「ない」に目が行きがちな中山間地だ。だがここには、子どもたちがのびのびと楽しみ、学べる自然環境がある。そして地域にとっても、こうして外部から子どもたちがやってくる機会は、見落とされがちなこの地の資源や魅力を存分に発揮するチャンスとなりうる。そんなことを改めて実感した、2025年夏のヤマナビキャンプだった。



一般社団法人 山学 代表理事
河合 達郎 氏

1987年5月3日 岐阜市生まれ
2006年3月 岐阜県立岐阜北高等学校 卒業
2010年3月 立命館大学国際関係学部 卒業

職歴

- ・株式会社朝日新聞社(2010年4月～2021年3月)
- ・岐阜県本巣市地域おこし協力隊(2021年4月～2024年3月)
- ・フリーライター、編集者(2021年4月～現在)
2024年3月より、朝日新聞岐阜県版でコラム「無人駅から」連載中。
- ・tete. (2023年5月～現在)
いちじくの栽培／加工／販売
- ・一般社団法人 山学 代表理事(2024年3月～現在)
学習支援／地域食堂／自然体験
ローカル線・樽見鉄道の無人駅で開く学習支援の継続に向け法人化。本巣市内の30代3人で設立。中山間地の子どものみに焦点を当てた活動を展開する。



山学レポート



いちじく農園「tete.」の
ホームページ



いちじく農園「tete.」の
Instagram